The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	産業革命期イングランドにおける労働者世帯の教育 : 手織工世帯を事例とした考察
Author(s)	大賀, 紀代子
Citation	大阪大学経済学. 2010, 59(4), p. 26-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

産業革命期イングランドにおける労働者世帯の教育*

― 手織工世帯を事例とした考察 ―

大　賀　紀代子†

第１節　本稿の目的と課題

本稿は，産業革命期イングランドの労働者世帯の教育状況について，従来行われてきた近代工業を対象とした視点からではなく，在来産業に焦点をあて考察を行うことを目的としたものである。

まず，リチャード・オルドリッチの研究から，産業革命期のイングランドにおける教育についてこれまでの研究動向の概観をえておこう。イングランドの民衆を対象とする教育の制度化は，近代工業において労働者を雇用する産業資本家の要求により成立したと考えられてきた[1]。しかし，オルドリッチに代表される最近の歴史的考察では，民衆に対する初等教育と工業化とのあいだには直接的な関連はほとんどないものとされている。とくに，教育水準の向上が産業革命に対して与えた影響は非常に小さいと考えられている。基礎的な識字率は，18 世紀後半までに，産業の発展に必要と考えられている 40％に達していたが，産業革命が進行するにつれむしろ大きく低下したと捉えられている。それは，ほとんど教育を受けていない者たちが労働者として工場に吸収されたこと，さらには，急激な人口増加が学校や教会の対応能力を上回ったことによるものであると考えられている[2]。この時期に義務教育等の国家制度が存在しなかったことも，産業革命期に教育水準の向上がなかった一因にあげられてきた。

このような一般的見解は，しかし，近代工業にのみ焦点をあてて考察をおこなった結果，導き出されたものではないだろうか。

近代工業に焦点をあてた教育の歴史的考察では，社会階級とジェンダーという２つの研究視角に重点がおかれてきた。

社会階級に関しては，次のような定説的な見解があった。貧民階級の子弟は，幼いころから家計の足しになるようにと労働に従事していたため，学校教育へのアクセスは，家計状況の逼迫度や雇用機会の有無すなわち社会階級によって決定されていた[3]。そのため，貧民階級である労働者には，経済的要因から，積極的に教育を受ける傾向は見られなかった―とするのである。

---

* 本稿の作成にあたり，杉原薫教授（京都大学），大阪大学経済学研究科歴史系の先生方にご指導頂いた。また，脇村孝平教授（大阪市立大学）にはロンドンでの資料調査において貴重なご教示を賜った。さらに，経営史学会関西部会 2009 年度 12 月例会（於大阪大学）において多くの先生方から有益なコメントを頂いた。記して厚く御礼申し上げる。

† 大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程

1 戸塚秀夫（1966）『イギリス工場法成立論』，未來社，207 頁.

2 Aldrich,R.（1996）*Education for the Nation,* London and NewYork: Cassell,100-101. : Mitch,D.（2004）“Education and skill of British labour force”, in R. Floud and P. Johnson, eds., *Cambridge economic history of modern Britain,* vol.1, Cambridge: Cambridge University Press, 354.

3 Aldrich, *Education for the Nation*, 9-10.

さらに，ジェンダーに関する考察では，男性と女性の間で，教育内容が大きく異なっていたことが重視された。女性には，針仕事や家政といった奉公人や主婦という役割に必要な知識と技能を習得することを目的とした教育が主に行われたという事例がみられる[4]。これは，男女間での職業の違いが存在していたためであると解釈されている[5]。

本稿では，これらの研究にみられる傾向を批判的にふまえ，「在来型の発展」をみせたとされる部門（traditional sector）に着目し，その担い手である手織工世帯を考察対象として，労働者世帯の教育の状況を明らかにする。「在来型の発展」とは，19 世紀を通じて，ヨーロッパでみられた手作業と中小仕事場による旧来の生産方式をもちいた産業部門である[6]。本稿では，このような部門について以下「在来産業」とする。

一般に，近代工業の進展により，在来産業は衰退していったと捉えられてきた[7]。そのため，在来産業である手織業は，近代工業の進展とともに衰退したと考えられてきた。その結果，その担い手である手織工は，機械化の浸透に従い発生した就職機会の激減や賃金の急速な低下からもたらされる貧困に苦しみながら，急速に没落していったとされている。このような視点からは，手織工世帯に対する自助および中央政府による救済は論じられることはなく，ましてや教育の実態が考察されることはなかった。そのため，在来産業における労働者世帯の教育の状況は明らかにされてこなかったのである。

そこで，本稿では，手織工に関する英国議会報告書を用いて考察を行った。英国議会資料は，議会に提出されるために作成されたか，あるいは前もって配布され議員の利用に供された文書である。いくつかある手織工に関する英国議会報告書のなかで，最も包括的であると思われる王立委員会報告（1839 年～1840 年）の手織工に関する報告書（*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers*）に依拠し，手織工世帯における教育の状況を考察する。この報告書は，「手織工の没落の実態を明らかにする」ことを目的とし，イギリス全土における手織工世帯の状況を考察した結果を述べたものである。

「王立委員会」は，国王特権の行使により，国王が議会内に直接設立した機関である。その構成員には，議員以外の者が多く含まれている[8]。その委員会より，手織工世帯における労働内容や労働環境，また稼得や生産している製品および手織工の持つ技能について考察された結果が，本報告書である。全体で，5 部で構成されており，その総括としてのレポートが 2 部続いている。

この資料からは，学校内における手織工の子弟の占める割合が全生徒数の約 13％から約 22％であったことや，無料の学校があるにもかかわらず，手織工は子弟を授業料のかかる学校に通わせるなど，彼ら・彼女らの教育に対する積極的な姿勢が明らかにできる。そして，手織工自身も働きながら学校に通っており，「読み・書き」（reading・writing）ができたことが窺える。また，男子と女子の間では，教育内容に大きな差はなく，女子も学校に通っていたことがみてとれる。さらに，教育をうけることができない世帯に対して，中央政府が教育を推奨していたことも明らかとなった。このように，在来産業に焦点をあてた観察では，労働者世帯

[4] Aldrich, *Education for the Nation*, 17-18.

[5] Berg, M.（1987）“Women’s work, mechanization and the early phases of industrialization in England”, in Joyce, P.（ed.）, *The historical meanings of work,* Cambridge: Cambridge University Press, 64.

[6] 鈴木良隆・大東英祐・武田晴人（2004）『ビジネスの歴史』有斐閣アルマ，7 頁.

[7] Bythell, D.（1969）*The handloom weavers: a study in the English cotton industry during the industrial revolution,* Cambridge: Cambridge University Press, 1-39.：吉岡昭彦編（1968）『イギリス資本主義の確立』御茶ノ水書房，120 頁.

[8] 丸善株式会社編（1973）『英国 19 世紀“ブルー・ブック”研究の手引』丸善，3 頁.

表 2-1　グロスタシャー州における手織工の子弟の就学（1840 年）

	学校数	生徒数	手織工の子弟の数	手織工の子弟の比率
週日学校（daily School）	55	3,527	463	13.1%
日曜学校（Sunday School）	28	3,629	802	22.1%

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* Pt. V, 1840, 489. より筆者作成。

表 2-2　グロスタシャー州における手織工の子弟の就学（1840 年）

		子弟数	比率
賃金を得ている（earn wages）		135	25.2%
賃金を得ていない		400	74.8%
合　計		535	100.0%
うち	授業料が有料の学校（pay-school）	60	11.2%
	授業料が無料の学校（free-school）	26	4.9%
	日曜学校	195	36.4%
	学校に通っていない	255	47.7%
	総子弟数	535	100.0%

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers*, Pt.V, 1840, 504. より筆者作成。

に対する教育の機会が多く存在していたことが明らかとなる。

本稿の構成は以下の通りである。

第 2 節では，手織工世帯における教育の実態を明らかにする。世帯における就学の状況について考察するとともに，その結果から，手織工世帯における教育に対する関心について明確にしていく。さらには，学校での教育内容の考察を通じて，手織工世帯の教育がどのようなものであったかを分析していく。

第 3 節では，手織工世帯の教育に対する中央政府の動きを明らかにする。手織工世帯において，教育の機会の獲得が不可能な世帯の存在を明確にしていく。そして，そのような労働者世帯に対する政府の役割を，19 世紀前半の教育制度の変遷の考察を通じて明らかにしていく。

第 4 節では，結論を述べるとともに，本稿での観察結果から得られたイギリス産業革命全般に対する見解を示す。

第 2 節　手織工世帯における教育

本節では，1840 年前後の手織工世帯における教育の実態を，就学の有無，教育内容等の考察を通して，明らかにしていく。

まず，手織工世帯における就学の有無について確認する。

表 2-1 は，南西イングランドにあるグロスタシャー州の手織工の子弟の就学について示したものである。

この表からは，手織工の子弟が週日学校（daily school）および日曜学校（Sunday school）[9] に通っていることが確認される。週日学校の全生徒のうち手織工の子弟は約 13 %であることが窺える。日曜学校においては，約 22 %であり，週日学校よりも幾分高くなっている。

続く表 2-2 は，同じくグロスタシャー州における手織工の就学について，195 人の手織工

[9] 日曜学校（Sunday school）とは，キリスト教会が日曜日に児童を集め，宗教教育や一般教育をする機関であり，18 世紀半ばごろ英国で貧困家庭の子弟を対象として始まったものである。

表 2-3　コヴェントリー市およびその近郊村における手織工の子弟の就学（1840 年）

	市・郊外（city・suburbs）					農村（rural parishes）				
	学校数	男子（boys）	女子（girls）	合計	女子の比率	学校数	男子（boys）	女子（girls）	合計	女子の比率
週日学校	18	309	206	515	40.0%	13	344	91	435	20.9%
日曜学校	16	298	347	645	53.8%	29	340	413	753	54.8%
合　計	34	607	553	1160	47.7%	42	684	504	1188	42.4%

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* Pt. IV, 1840, 94-95. より筆者作成。
（注）7 歳以上の男子（boys）および女子（girls）が対象。

を対象とし，その子弟 535 人の就学について表したものである。

この表によると，就学している子弟とそうでない子弟の割合はほぼ同率となっている。また，授業料を支払って子弟に就学させている手織工世帯が，無償の学校へ通わせる世帯よりも多いことがわかる。また，賃金を得ていない子弟が約 75％であることも同時に明らかとなる。すなわち，手織工世帯においては子弟を積極的に就学させていた場合があったことが窺える。

さらに，表 2-3 からは，都市部と農村の双方の手織工世帯における就学を確認することができる。

この表は，イングランド中南部に位置するウォリックシャー州コヴェントリー市[10]を中心とした地域の手織工の子弟の就学を表したものである。この表からは，都市部および農村部において，週日学校と日曜学校の両方で子弟の就学が窺える。生徒数をみると，都市部のほうが農村部よりも週日学校に通う傾向が強いといえる。週日学校における生徒の男女比は，都市部で約 3 対 2，農村部では約 4 対 1 であり，都市部の方が女子の割合が大きくなっている。しかしながら，全学校における男女比については，両地域でほぼ 1 対 1 であり，大きな違いは見られない。

すなわち，当時の手織工の子弟の教育は，従来の研究にみられる見解とは異なり，主な働き手となる男子のみを対象として行われていたのではなく，女子も教育をうけることが可能な環境が整い始めていたといえる。

次に，手織工の子弟が週日学校においてうけていた教育内容について明らかにしていく。

表 2-4 は，グロスタシャー州の手織工の子弟が通っている週日学校について，生徒数，教えている内容および教育方式について表したものである。ここでは，29 の学校を対象としており，その生徒数は男子が 633 人，女子が 297 人である。男子と女子の両方を対象としている学校が 7 校であり，また男子のみを対象とする学校は 7 校，女子のみを対象とする学校は 5 校である。教えている内容は，全ての学校において，「読み・書き」が教えられていることが窺える。また，学校によっては「算数」（mathematics），「地理」（geography）等の内容も教えている。さらには，「会計」（accounts），「簿記」（book-keeping）等の実務的な内容も教えていたことが明らかといえる。また，男子と女子の間で，教育内容に大きな差は見受けられず，女子に対しても「読み・書き」をはじめ，「算数」や「地理」を教えていたことがわかる。

イングランドでは 1790 年代にはいり教育方式が考案された。ジョセフ・ランカスター（Joseph Lancaster）により考案された「ランカスター方式」（Lancasterian system）と，アンドリュー・ベル（Andrew Bell）によって考案された「ベル方式」（Bell’s system）である。前者は，1808 年にその促進のため「王立ランカスター協

[10] 現在，コヴェントリー市はイングランドのウエスト・ミッドランズ州にある都市である。しかし，1840 年前後の英国議会資料および国勢調査においては，ウォリックシャー州の都市として表記されている。

表 2-4　グロスタシャー州における週日学校の生徒数，教育内容，教育方式（1840 年）

学校	男子	女子	教えている内容	どのような教育制度を指導形態として採用しているか？学校ではベルやランカスタープラン（ランカスター方式？），もしくは他の方式に従っているか？
No.1	40	0	読み，書き，算術そして地理。	読み，綴りに関しては，ベル方式を採用している。
2	42	0	読み，綴り，書き，英語の文法，地理，地図の使い方，そして天体，簿記，球積法。	教師は，特定の教育制度に限定していない。;「彼」の生徒の上達を促すのに最適であると判断される計画を，「彼」は採用してる。生徒たちは，ベル方式やランカスター方式下で教わってはいない。
3	0	26	読み，綴り，書き，算術，裁縫，編物。	特定のシステムはない。；例外として，読みでは，ランカスター方式をおもに採用している。
4	35	0	読み，書き，算術。	石版や砂などを使って書く方式は推奨されている。
5	49	0	読み，書き，算術，歴史，地理，文法，幾何学，図画，音楽。	彼らは，読み，書き，算出を教えられている。；年長の少年は，歴史，地理，文法；そして才能がみられる生徒には，幾何学，絵を描くこと，音楽。
6	0	40	読み，編物，裁縫。	na
7	10	0	読み，書き，算術，教会の公教要理を週に 2 回	各クラスは，男性教師もしくは女性教師によって指導されている。
8	74	25	読み，書き，算術，教会の公教要理，宗教教育，女子には先の科目に加え裁縫も。	ベル方式もしくはナショナルスクールシステム，ほとんど変更されない。
9	58	44	読み，書き，会計，綴り，編物，裁縫。	「ベル博士のシステム」=（ベル方式）
10	60	0	教師長の学校の男子はラテン語，英国の歴史，地理，算数，書き，会計。下位の教師の学校の男子は読み，書き，会計のみ。	学校は 2 つの部分に分けられる。男性教師の長と下位の男性教師それぞれの下で；前者が取り決めを決定。
11	120	0	生徒が英国の公教要理を必要とする場合は，キリスト教の原理。綴り，読み，発音，計算，会計；女子には先の科目に加え裁縫と編物。	有益な知識，宗教に関する教育，国教の教会の原則の下での；ベル方式もしくはランカスター方式の計画はまったく守られていない。
12	67	52	読み，書き，算術，女子には針仕事。	ナショナルシステムもしくはベル方式
13	na	na	読み，書き，算術，生徒が要求した教育のその他の分野。	ランカスター方式もしくはブリティッシュシステム
14	na	na	読み，書き，綴り，算術，裁縫，模様（marking），編物。	ランカスター方式
15	0	40	読み，書き，算術，針仕事。	ナショナルシステムもしくはベル方式
16	16	10	読み，書き，針仕事。	na
17	na	na	読み，書き，算術；女子には先のものに加えて裁縫。	ベル方式もしくはナショナルシステム
18	20	18	算術の初歩，幾何学，計算法，足し算，引き算，掛け算，割り算，金銭の計算法，重さや寸法の計算法，書き，物体の授業など。	共通の；口述や質問によって，美術館では，学級委員による，読みの時間は。ワイルドスピンズシステムの模倣。
19	20	10	読み，綴り，計算法，自然科学の歴史，Senpture Lessons，地理の要素，文法，地理。	幼児学校制度は一般的に採用されている；ランカスター方式は読みを教える際に使われている。
20	na	na	na	ブラウンと Bilby's システム
21	0	10	読み，書き，算数，幾何学，言語教育。	ワイルダースピンズシステム
22	0	na	読み，書き，算数；女子には先のものに加え裁縫。	ナショナルシステムもしくはベル方式
23	na	na	読み，書き，算数；女子には先のものに加え裁縫。	ナショナルシステムもしくはベル方式
24	0	10	読み，書き，算数，裁縫。	ベル方式
25	na	na	読み，計算法，綴り，編物，裁縫。	幼児学校制度
26	22	12	読み，書き，算数の初歩。	組み分けシステム以外の特定の方式は採用していない。
27	na	na	読み，容易な裁縫，編物。	子供たちはとても幼いので特定の方式は採用していない。
28	na	na	読み，綴りなど。	na
29	na	na	読み，書き，算数，針仕事，文法。	現在，幼少では，特定の方式に従っていない。
合計	633	297		

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* Pt. IV, 1840, 96-116. より筆者作成。
（注）「；」の使い方は原文に従った。

会」（Royal Lancasterian Institution）が設立され，1814 年にはイングランドの主要な教育団体である「内外学校協会」（British and Foreign school Society）により全国的に普及されていく。一方，後者は，1811 年貧困層の教育を促進するために設立された団体である「国民協会」（National Society for Promoting the Education of the Poor）によって普及していった。

表に記載されてある学校では，主にこの２つの教育方式を採用し，その下で教育を実践していたことが窺える。前者は，非宗派主義的宗教教育，寄付金への依存，生徒に対する厳格な規律を特徴としていたのに対し，後者は国教会の教義を強調し，授業料を徴収する傾向にあった。しかし両者には，大量教育，能力別クラス編成，短時間ごとのカリキュラム編成，相互教育の理念と賞罰制度，軍隊的規律，体罰といった共通する特徴もあった[11]。これらの方式の採用が，中央政府の教育への介入を促す結果となったが，その点について次節で詳しく述べる。

さらに，手織工の子弟の学校での教育期間について，下記の記述より明らかとなる。

資料１

……下記の概要は 14 の学校に対する個人的な視察から調べたが，そこにおいて 948 人の子供が毎日教育を受けている；私が確かめた 198 人は手織工の子供であり，教育を受けている数の３分２は男子である。

スクーリング（schooling）の期間はほんの平均３年であるようで，学校を辞める時期は 11 歳６か月から 13 歳の間のようだ。……

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers*, Pt.V, 1840, 504.

この資料は，グロスタシャー州の手織工世帯の教育について述べたものである。手織工の子弟が毎日学校で教育をうけていた可能性があることに加え，その期間が３年であり，11 歳６か月から 13 歳の間に学校での教育を終えていることから，手織工世帯においても学校での教育が約８歳から 10 歳の間に開始されたことが推測される。

次に，手織工世帯において，実際に手織工として働く者が有する基礎的学力について考察していく。

表 2-5 は，グロスタシャー州における手織工の学力について表したものである。この表は，表 2-2 で対象とした 195 人の手織工について考察したものである。195 人のうち，「読み・書き」ができる者が全体の半数以上を占めていることが窺える。一方，「読み・書き」ができない者は１割以下である。

続く下記の資料からは，数多くの手織工が学校教育を受けていた可能性があることが窺える。

資料２

……彼らはとても（経済的に：引用者）困窮しているか？－現在ではしていない，なぜなら彼らは広く雇用されているから。彼らの労働の価格はもちろんかなり下がっている；しかし技能が高くまた精力的な労働者（手織工：引用者）は容易に彼の家族を養うだろう。

あなたが話す地区の人々の状態についての関心の主な考えは何か？－手織工の多くは知性のある男性である。彼らの多くはナショナル・スクール（National school）もしくはランカスター・スクール（Lancasterian school）において教育の初歩を受けている。；大部分は高熟練の労働者であり，彼らの能力は鋭くなっており，また機敏さに富んでいる。；決して彼らは知性が不足してはいない。

彼らは，子供の教育を奨励することを望んでいるか？－彼らは非常に彼らの子供を愛し

[11] 松塚俊三（2001）『歴史のなかの教師』山川出版社，160-161 頁.

表 2-5　グロスタシャー州における手織工の学力

	手織工の数	比率
文字の読み，書きができる	108	55.4%
読むことはできるが書くことはできない	72	36.9%
両方ともできない	15	7.7%
総手織工数	195	100.0%

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* Pt. V, 1840，504.

ている；彼らの本能的な愛情はほんとうに非常に強い。しかし残念ながら，過度に甘やかしていることがまったく明らかになってしまう。親の管理がひどく欠乏し，実際家庭内でのしつけが大抵の場合においてなおざりになっている。ブリティッシュスクール（British school）が最初開校したとき人々は彼らの子供の教育について気にかけていないようであった；しかし，学校でのモラルコントロール（moral control）の結果からくる利益を経験してから，彼らのその利益を得たいという欲望は増加している。……

（出所）*Select Committee on Education of People of England and Wales,* 1835 ,14.

この資料は，ロンドンのベセナル・グリーン地区の手織工の実態を述べたものである。手織工の多くが「ナショナル・スクール」もしくは「ランカスター・スクール」に通っていることが窺える。これらの学校は週日学校であることから，手織工自身も週日学校に通っていたことが明らかだといえる。さらに，学校での教育をうけている手織工は，何らかの高い技能を保有していた。その上，十分に家族を養えるだけの経済的余裕があったことが推測される。つまり，従来の研究では，手織工世帯は一般的に困窮していると認識されていたが，教育をうけている世帯では経済的に逼迫していなかった可能性があると考えられる。

また，この資料は子弟の教育についても述べている。このように，親が学校での教育をうけ，また高い技能を保有しており，困窮していないであろう手織工世帯では，子弟の就学について積極的であったことが推測される[12]。

以上の考察より，明らかになったことは以下の3点である。第1に，1840年前後の手織工世帯において教育に対する高い関心が存在していたことである。第2に，男子のみではなく女子も学校教育を受けており，男女間で教育内容に大きな差がないことである。第3に，週日学校で教育をうけていた手織工は，高い技能をもっていたとされる。このことと識字能力や計数能力の高さとは，伝統的とされる在来産業の職場においても何らかの関連があったと推測できよう。

さて従来の手織工に関する研究では，手織工は主として男工であると捉えられてきた。そのため，女子は家計の主な稼ぎ手としての役割を将来において期待はされてはいないとされてきた。しかし，本稿の考察で明らかとなったように，手織工世帯では女子に対しても週日学校に通わせており，その教育内容は男子と大きな差はない。一方，当時の「手織工」には女性労働が一定以上の比率で存在していたことが判明している[13]。したがってこのことは，1840年前後

[12] もちろん「識字率＝高技能」は無条件に成立するわけではない。しかし，たとえば斎藤修（2008）『比較経済発展論』岩波書店，66-74頁における「熟練」についての議論にみられるように，就労以前の段階での教育が生産性をあげることには肯定的な見解が少なくない（70頁）。

[13] 大賀紀代子『産業革命期イングランドにおける手織工世帯の労働と教育に関する一考察―『王立委員会報告』（1839-41年）を中心とする分析―』（大阪大学経済学修士学位論文）および大賀紀代子『産業革命期イングランドの女性手織工―1841年センサス個票によ

において，男性労働のみではなく女性労働においても，家計に占める比重が大きかった可能性を示唆していると思われる。

そして，手織業において，担い手である手織工世帯のうち，教育を受けている世帯については経済的な逼迫を免れていた可能性が窺えることからは，手織工世帯によっては経済的困窮から遁れるための将来的手段として，週日学校での教育を選択していたのではないかと考えられる。これは，「貧困階級の世帯では親も子も労働者としての役割を担うため，教育はあまり浸透してない」という従来の近代工業に焦点をあてた考察結果とは異なる結果であることを繰り返しておきたい。

第3節　手織工世帯の教育に対する中央政府の介入

本節では，前節で明らかとなった手織工世帯における教育の普及に対し，中央政府（連合王国政府）が介入していく様子を考察していく。

まず，手織工世帯の教育に対し，下記の資料が存在する。

資料3

……しかしながら，手織は高度な技能によって，或いは手織工に必要とされる体力と技能のくみあわせによっていくつかに（部門が：引用者）分かれており，こうした不便（仕事がない時期があること：引用者）から除かれている。これらの部門では，平均的によい賃金を確保するために，私たちがこれまで間接的に言及してきた行動の訓練，知性，禁欲，賢明さによって，労働者は彼らの仕事に対する人数を調整することができるかもしれない。

しかし行動の訓練，知性，禁欲，賢明さは，よい教育の成果であり，嘆かわしいことに，英国の諸島において労働者階級でよい教育を受けてきた，もしくはうけているものはほとんどおらず，もしくは教育をうける手段があるものもほとんどいない。よい教育の第一歩－良い教師の十分な供給－が必要である。よい教師の不足以上に，学校の数は不足している。……

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* 1841 , 121

この資料は，手織工に関する王立委員会報告書の総括レポートの一部である。総括レポートでは，イギリス全体の手織工世帯の実態を考察した結果，手織工世帯の没落・困窮に対する救済策を論じている。ここからは，教育の機会が手織工世帯において十分にいきわたっていないことが，手織工の貧困をもたらしている一要因になっているという理解が当時あったことがわかる。

しかし，前節で述べたように，手織工世帯においては学校での教育に対する高い関心が存在していた。そのため，教育を受けたいという意思があっても，なんらかの支援なしでは教育をうけることができない世帯が存在しているのではないかと推測される。すなわち，手織工世帯に対しては，貧困の打開のため，自助に任せるというばかりではなく，公的な手段によって教育の機会を創設する必要性が浮かび上がってくる。

そこで，次に教育の機会の変化について考察していく。

図1は，19世紀前半のイングランドとウェールズにおける週日学校数の変化を示したものである。

1830年代に週日学校の数が倍に増加している。さらに，1840年代には，1830年代の3倍に増加している。

続く表3は，同じく19世紀前半のイングラ

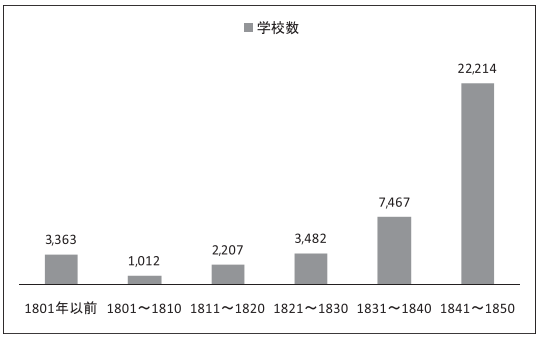
るプレストン地区の分析—』（2008年度社会経済史学会第77回全国大会報告）を参照されたい。

表 3　イングランドとウェールズにおける人口と週日学校の生徒数

	人口	週日学校の生徒数	週日学校に通っている割合
1818 年	11,642,683	674,883	17.25 人に 1 人
1833 年	14,386,415	1,276,947	11.27 人に 1 人
1851 年	17,927,609	2,144,378	8.38 人に 1 人

（出所）*Report and Tables on Education,* 1852-3, 13.

図 1　イングランドとウェールズにおける週日学校の増加数



（出所）*Report and Tables on Education,* 1852-3, 14. より筆者作成。

ンドとウェールズにおいて，人口と週日学校の生徒数の変化について述べたものである。

この表からは，総人口に対する週日学校に通っている人の割合が，1818 年，1833 年，1851 年と年を追って増加していることが窺える。つまり，1818 年から 1851 年の間では，総人口の増加分よりも学校に通う生徒数の増加分のほうが大きいということが明らかとなる。

以上のことから，イングランドにおける教育の機会は，1851 年までに増加していったことが明らかといえる。

この 19 世紀前半を通じた教育の機会の増加には，教育方式の発達と，それに対する中央政府が行った普及の際の支援があったと考えられる。

これらの方式は，前節で述べたように，グロスタシャー州における手織工の子弟が通う週日学校で採用されていたものである。これらのシステムを普及させていった団体は，19 世紀を通じて多くの学校を設立し，1833 年には中央政府のよる資金援助をうけることとなった。この援助が，中央政府による初めての教育の普及に対する介入である。つまり，このこれらの教育方式の普及に伴う教育の機会の増加は，1833 年以降，政府の支援のもとさらに拡大していったといえる。

1840 年代半ばにはいり，新しい方式が導入されていく[14]。これは，中央政府の主導のもとおこなわれていった。その背景には，1840 年代に入り，それまでの学校制度に対する改革の要望が大きかったとことが一因であると考えられる。

下記の記述は，その改革の必要性を述べたものである。

資料 4

……労働者階級間の結合から生まれる悪を取り除き，また彼らが実際の不平の種や想像上の不平を取り除くために身体的力や荒々しさに訴える傾向に目を向けなければならない。第一に，しかしながら，私たちの学校を改革しなければならない。……

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* Hickson report, 1840, 61

この資料は，手織工に関する王立委員会報告書の総括の役割を果たすヒクソンレポート（Hickson Report）に記載されてあるものである。このレポートは，資料 3 と同様に，イギリス全

[14] Aldrich, *Education for the Nation*, 64.

土の手織工世帯の実態を考察した結果にもとづくものである。これらの記述は，労働者の生活を向上させるのは，1840 年時点で展開されていた教育制度を変える必要があることを示唆している。

また，続く資料 5 は，教育の充実には政府による法整備等の政策が必要であることを述べている。

資料 5

……労働者階級への教育というよく考えられた計画は，彼らの状態を向上させるのに最も力のある手段であろうと思われるが, 私は,（中央：引用者）政府による行政上および司法上の基盤においてさまざまな変革（various alteration）が要求されるとも考えている，もしそれをつくるのであれば，結果，同様に大変効果的であろう；それらなしでは，教育の目的はかなり広範にそこなわれるであろうと考えている。親の一部に教育を義務化するための法律がなければ，学校は最も必要とする人々—最も困窮した階級が出席しないであろう……

（出所）*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers,* Hickson report, 1840, p. 69

この記述は, 資料 4 と同様に, ヒクソンレポートに記載されているものであり，全国の手織工世帯の実態から導き出された見解であるといえる。この資料からは，労働者に対する教育を有効なものにするには，中央での立法により子弟の教育を義務化すべきであるという主張が窺える。すなわち，義務教育の必要性と，そのための中央政府による政策の重要性を示唆していると考えられる。

このような教育に対する政府への要望に呼応するような形で，1840 年代を通じて，中央政府の教育への関与は拡大していった。

その流れは，1839 年には中央政府の教育に関する部局が設立されるのを期に本格化し，1846 年には大きな転換点を迎える。つづいて，さきほど述べたように「ランカスター方式」と「ベル方式」にかわる新しい教育方式を中央政府が普及させた。さらに，中央政府の援助で立てられた学校に対してその運営に中央政府が責任をもつことが決定された。また，教師に対し資格付与制度を成立させる等，教師が政府に雇用されているかのような政策を展開していった[15]。

それは，まず補助金についての制度である政府教育援助 Government Aid to Education を確立したことである。このような動きの中，中央政府の補助金の支出額は，1839 年では年間 4 万ポンドであったが，1851 年には 15 万ポンドと約 4 倍になっている[16]。そして 1851 年には運営に税金のみが使われている学校が 610 校存在しており[17]，1853 年には教育に関する部局は行政機関のうち最も大きいものの一つになっていた[18]。

本節の考察を通じて明らかとなったことは，以下のようにまとめられる。1840 年前後の手織工世帯において，教育をうけることができない世帯が存在したことから，1830 年代から中央政府の教育への介入が開始し，教授方式の普及に伴い学校数が増加していった。そして，1840 年以降，より多くの者に教育をうける機会を与えるため，中央政府により新しい教育制度がつくられていったことである。

---

[15] 1856 年には枢密院教育委員会（Committee of Privy Council）の副議長が代表を務める教育局（Education Department）が誕生する。これは，当時のイギリスにおいて国の最も大きな行政機構であった。そして 1899 年の教育法により，教育局，科学技芸局（the Science and Art Department），慈善委員会（the Charity Commissioners）の教育的職務を統合した教育院（Board of Education）が設立され，国家的教育統制が進んでいった。Aldrich, *Education for the Nation*, 82-85.

[16] *Report and Tables on Education,* 1852-3, 12-13.

[17] *Report and Tables on Education,* 1852-3, 123.

[18] Aldrich, *Education for the Nation*, 82-83.

第４節　結論

以上の在来産業に属する労働者に着目した教育についての考察より得られた結果は，以下の3点にまとめられる。

第１に，1840年前後の手織工世帯における教育状況は，その経済状態によって大きく２分されていたことが窺える。自らの力で学校教育をうけることができた世帯と，一方で，自らでは教育をうけることが不可能な世帯である。前者の場合，手織工は高い技能を保有しており，さらに，生活を送るうえでの十分な賃金を獲得していたことが明らかとなった。つまり，従来の研究において貧困に苦しんでいたとされる手織工世帯は，教育の世帯内における導入という救済策をとることで，貧困の状態から免れていた可能性があることが示唆される。

第２に，中央政府による介入により，教育の機会が増加したことが窺える。1830年代における中央政府の介入と時期を同じくして，学校数は増加しはじめ，1840年代には中央政府による新しい教授システムの普及などに代表されるような教育制度上の変革が，中央政府によって行われた。この変革は，1830年代の制度では，手織工世帯をはじめとする労働者世帯が，自らの力で教育の機会を獲得することができなかったことによるものである。このような世帯では，貧困に苦しめられていたことが推測された。すなわち，手織工世帯の生活の向上に，中央政府が関与していたといえる。

第３に，自らの力で教育をうけていた世帯においても，教育に中央政府が間接的に関与していたことが窺える。1833年に，中央政府は２つの教授システムの採用を奨励し，その全国的普及を促進していた。そのなかで，手織工の子弟が通う学校でも，これらのシステムが取りいれられ，それに基づいた中央教育が行われていたのである。

これらの考察結果は，従来の近代工業に焦点をあてた考察から得られる，労働者階級に対する教育に関する見解とは，いささか異なる認識を呈している。

従来は，学校教育へのアクセスは社会階級によって決定されており，労働者階級は教育をうける機会が十分ではなかったと捉えられていた。また，経済的要因により子弟を労働者として働かせるため，教育をうけさせることができなかったと認識されている。

しかし，在来産業に着目し，その担い手である手織工世帯を対象とした本稿の考察結果からは，手織工世帯における教育への積極的な関心が明らかになり，貧困の打開策として教育を捉えていた可能性が浮かび上がってきた。そして，このような教育への関心は，中央政府の制度整備によって社会的に広がっていったといえる。

そのなかで教育内容において男子と女子の間で大きな差が見られないことは，男子だけでなく女子に対しても，将来，家計における主要な稼ぎ手となると世帯が捉えていた可能性があることを示唆しているであろう。

以上の考察結果は，大沢真理による救貧法の分析により明らかとされた「産業革命期イギリスにおいて，自由放任主義から中央政府活動の拡大および積極化への変遷がみられた」という見解[19]との間に，一定の整合性がみられる。19世紀前半には自由放任主義の下で行われていた教育に，産業革命終盤になるにつれ国家の関与が増大していったとするならば，イギリス産業革命期は，自由放任主義から中央政府活動の拡大および積極化への変化の時期であった可能性があるのではないか。

今後の課題としては，このような視点から，手織業以外の在来産業についても考察対象とし，その担い手の教育の実態を明らかにしていきたい。また，本稿で用いた手織工に関する王

[19] 大沢真理（1986）『イギリス社会政策史：救貧法と福祉国家』東京大学出版会，11-16頁.

立委員会報告からは，教育された内容についての具体的な記載はあまりみうけられない。そのため，他の資料を用いてさらに考察していきたいと考えている。

The educational condition of the labor class: a study of hand loom weavers in England during the Industrial Revolution

Kiyoko Oga

In this paper, I study the educational condition of the labor class in England during the Industrial Revolution. Most of the studies on this subject have been made on the (small) influence of the education on the development of the *modern* industries. In this paper, however, I discuss its relation to one of the *traditional* industries in England；the handloom weaving.

In several studies on the connection between the educational system and the modern industry, the analyses have been made, mainly, from two points of the view; social class and gender.

What seems to be lacking in those traditional views of study is the consideration of the labor class in the traditional industry rather than in the modern sector.

The educational condition of the labor class in the hand loom weaving and the household of hand loom weavers need to be examined in detail now.

As the results of my investigation into their livelihood in the early 19th century that was recorded in "*The Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers*" by the committee in the Parliament, the three important points are figured out.

First, the ratio of the children of hand loom weavers to all students in the schools was about 20% on the average. In addition, the parents made their children go to the school which needed a considerable amount of charge. In short, the hand loom weavers were interested in the development of their educational career.

Secondly, the girls were taught the same subjects in the schools as the boys'.

Thirdly, the state-government gave the poor some opportunities to go to school.

From these findings, it can be concluded that the laborers had a strong desire to get education in the schools during the Industrial Revolution.

JEL Classification: N33

Keywords: the Industrial Revolution, education, the labor class, hand loom weavers